

# 「縫う」と「編む」の認知意味論的分析

八 尾 紀 子

- 1 はじめに
- 2 現象素と多義の派生
  2. 1 多義語の定義
  2. 2 現象素とは
- 3 「縫う」の意味
- 4 「編む」の意味
- 5 「縫う」と「編む」の比較
- 6 おわりに

多義語「縫う」と「編む」は、類似した意味を持つ語である。この二語の類似点と相違点を明らかにするため、認知意味論の枠組みを用い、それぞれの意味の分析をし、多義の体系を考察する。その際、国広哲弥の提唱する「現象素」という概念を用いて考察を行う。比喻による派生義に関しては、Lakoff らの「領域間の写像」という考え方を用いた説明を試みる。そして、多義を構成するそれぞれの語は、すべて同一の現象素を持ち、その一部に焦点を当てたり、具象的な領域から抽象的な領域へと写像することによって、多義が生じることを示す。

## 1 はじめに

近年、George Lakoff の *Women, Fire, and Dangerous Things* (1987) や John R. Taylor の *Linguistic Categorization. Prototypes in Linguistic Theory* (1989) で、多義性について詳しく論じられて以来、多義語に関する認知言語学的研究が盛んにおこなわれるようになってきている。それらには、比喻による多義の派生の説明が充実している。それと並行して、国広哲弥 (1994, 1997, 2006 など) は、現象素という独自の概念を用いた多義の研究を進めてきている。国広の研究も、人間の認知作用に着目したもので、Lakoff らの研究と共通する部分がある。

本稿では、Lakoff の比喻による多義の分析を参考にしながら、国広の分析方法に基づいて、類似した意味を持つ多義語「縫う」と「編む」の意味分析を行い、両者の類似点と相違点を明らかにし、現象素が意味の派生を説明するのに有効な概念であることを示したい。

## 2 現象素と多義の派生

### 2. 1 多義語の定義

従来、多義語は、同音異義語との区別の観点から定義され、同一の音形にいくつかの意味があり、それらが何らかの意味的なつながりを持つものとされてきた。しかし、意味的なつながりとはどのようなものかの説明はなされていなかったため、国広は、『意味論の方法』で、その中身を考察し、『理想の国語辞典』で、次のように定義した。

[複数の] 意味が意味的に関連をもっているか、あるいは同一の現象素に基づいていると見られる場合には、全体で一つの多義語を構成する。

(175-176)

その後、多義の多くは、比喻や換喩や心的焦点の移動などによって生じ、それらはすべて同一の現象素に基づいたものであり、機能語のように現象素を持たないもののみが純粋に意味的関連性があるということに気づき、次のように修正した。

同一の現象素に基づいているか、同一の抽象概念に基づいている場合に多

義を構成する。

(国広 2006：5)

つまり、現象素を持つすべての語の多義の意味は、その同一の現象素に基づいているということになる。

## 2. 2 現象素とは

次に、現象素の定義を確認する。

「現象素」とは、ある語が指す外界の物、動き、属性などで、五感で直接に捉えることが出来るものである。従来の「指示物」(referent)に近いが、思想的な背景が異なる。単なる外界の存在物ではなく、人間が認知したものである。その認知のしかたは、言語の用法を通じて捉える。

(国広 1995：40)

また、現象素は「人間の認知作用を通して、ひとまとまりをなすものとして把握された現象」(国広 1994：235)と説明されている。そして、このような現象素を「いろいろの角度から捉えたり、焦点を絞ったりすること」(1997：226)によって多義が生じると考える。

例えば、「転がる」の現象素は、「丸い物体が、平面に接して、回転しながらすすむ」<sup>(1)</sup>と説明される。それを図示すると図1のようになる。

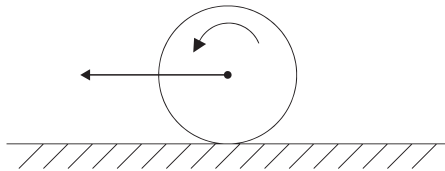


図1

基本義は、「丸い物体が、ほかの物の表面を回転しながらすすむ」で、用例を挙げると、「ボールが転々と外野をころがった」「丸い鉛筆は転がってゆかに落ちやすい」などがある。

では、派生義がどのように生じるかといえば、「棒状・筒状のものが倒れる」という意味は、現象素の結果状態に焦点を絞ることによると説明される(国広 2006：57)。例えば、「私はつまずいてころがった」では、現象素の物体の移動

という要素がなくなり、状態変化のみを表している。また、「私は畳にころがって本を読むのが好きだ」という文の「ころがる」は、「人間が体を平面に横たえる」という意味で、先の例文が、意図しない出来事を指すのに対し、この例文は、意図的な動作を指し、先の派生義から「意図化」によって、派生される（国広 2006：57-58）。

### 3 「縫う」の意味

ここから、具体的な多義語の分析に入る。

「縫う」の意味を『大辞泉』と『明鏡国語辞典』と国広哲弥の『日本語の多義動詞』を参考にまとめると、次のようになる。

ぬう [縫う]

- ① （布などをとじ合わせるために、）糸を通した針を布地などの裏表に交互に刺し進める。

「シャツのほころびを縫う」「針目をそろえて布を縫う」

語法：～ヲに〈対象〉をとる。

- ② ①の動作をして、衣服などを作る。

「着物を縫う」「雑巾を縫う」

語法：～ヲに〈結果〉をとる。

- ③ ①の動作をして、材料をある製品に変える。

「古いシャツを雑巾に縫う」

語法：～ヲは〈対象〉で、～ニは〈結果〉を表す。

- ④ 傷口を針と糸でとじ合わせる。

「頭を3針縫う」

- ⑤ 刺繍をする。①の動作をして、布の表面に模様や文字を描き出す。

「襟に、持ち主のイニシャルを縫う」

- ⑥ （古風）槍や矢などの鋭い武器が刺し貫く。

「矢が袖を縫う」

- ⑦ 事物や人々の間をジグザグに進む。

「人ごみを縫って歩く」

- ⑧ 道などが狭い隙間を曲がりくねりながら続く。

「細い道が、緑の谷をぬってどこまでも続いている」

- ⑨ 飛び飛びにある仕事などの空いている時間を見つけて、何か別のことを

する。

「京都に来たので、仕事の合間をぬって観光をしよう」

「縫う」は、「針に糸を通して、布地などを突き刺してジグザグに進み、とじ合わせる」を現象素とし、各意味は、その一部に焦点が絞られることによって生じる。または、比喩として派生する。

①が、基本義で、現象素を忠実に表現している。②と③は、結果目的語をとり、国広（2006）の多義派生の型では、意味格多義に当てはまる。意味格多義は、動詞に限られる派生である。動詞の現象素には、動作の場所、対象物、必要な道具などが含まれ、そのどれに焦点があてられるかによって、選ばれる意味格が異なり、動詞の表面的な意味が異なって見える。その表面的な意味が、意味格多義で、動詞の表す動作自体は変わらない。<sup>(2)</sup>ゆえに、これらの意味は、①からの派生と考えるのではなく、①の下位区分となる。④は、現象素の対象物が皮膚に限定されたものなので、①の意味に含まれると考えることができる。⑤は、結果目的語をとる意味格多義である、と国広（2006）は説明しているが、現象素の「とじ合わせる」という部分が消えているため、現象素の一部に焦点を当てた派生義と考えるのが適切であろう。さらに、「文字や模様を描き出す」という意味が付け加えられている点にも注目し、派生義と判断する。

⑥から⑧は、比喩表現である。比喩に関しては、Lakoff（1993）と Lakoff and Johnson（1999）の定義を用いて分析する。

Metaphors are mappings across conceptual domains. (Lakoff 1993 : 42)  
...conceptual metaphors are mappings across conceptual domains that structure our reasoning , our experience, and other everyday language.  
(Lakoff and Johnson 1999 : 47)

つまり、比喩とは、領域間の写像だということである。その際、元の領域のイメージ・スキーマが先の領域に写像される。

ここで、イメージ・スキーマとは、「感覚運動的な経験、場所・空間の認知的な経験、等によって形成されるゲシュタルト的なパターンに基づく認知構造の一種」（山梨 2012 : 17）で、具象的な意味の世界から抽象的または主観的な概念への意味の派生の多くは、イメージ・スキーマの比喩的な写像によって可能となると考える。例えば、容器のスキーマは、容器（コーヒーカップ、ペ

ットボトル、皿、バケツなど) のイメージの個々の具体的な特徴を捨象し、抽象的なレベルの次のような図で表すことができる。

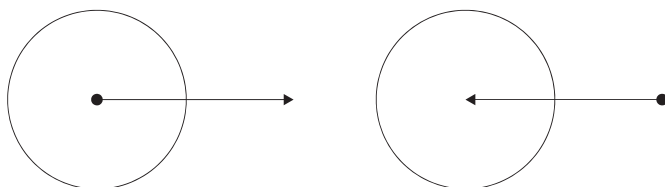


図 2

図 2 では、容器のイメージが、円形で示され、容器に出入りする存在が黒い点で示されている。

イメージ・スキーマは、2 節で説明した現象素を抽象化して図示したものとほぼ同じと解釈することが出来る。そこで、「縫う」の現象素を図示すると、次のようになる。

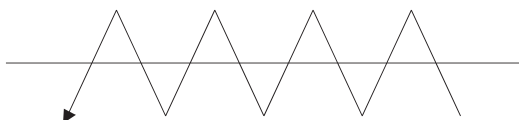


図 3

複数個の布状のものを突き刺してジグザグに進む様子を描いたもので、つなぎ合わせる様子は表現できていないが、比喩による多義の派生には、この図で説明できる。<sup>(3)</sup>

⑥は、現象素の一部である「鋭いもので、刺し貫く」様子に焦点を当てた比喩と考えられる。⑦は、現象素の一部の「ジグザグに進む」様子に焦点を当てた比喩である。この時、針と糸で布地を縫っているときの機敏な動きも、写像としてとらえられているように感じられる。⑧は、⑦をさらに擬人化した比喩で、例文として、「細い道が、緑の谷をぬってどこまでも続いている」が挙げられる。『新和英大辞典』に載っている例文であるが、A narrow path meanders endlessly through the green valley. と英訳されている。meander は、*Oxford Dictionary of English* によると、follow a winding road と説明されていて、ジグザグに道が続いている様子を表している。ここで、英訳中の through という表現に注目すると、「どこまでも」という日本語のニュアンス

を表現しているようだが、「縫う」ことにより、縫い目がつながる様子を写像した比喩となっていることを示唆するものと思われる。そして、道は実際に進むことはないので、⑧は、あたかもジグザグに進むような動きがあって、その結果状態が、そこにあるかのように表現する痕跡表現と言える。ゆえに、派生義と考えられる。⑨は、時間的比喩で、具象的な空間の領域から抽象的な時間の領域に写像された意味である。時間の流れに沿って仕事が進んでいて、その合間をぬうように観光を入れるイメージになる。図で表すと次のような感じであろう。

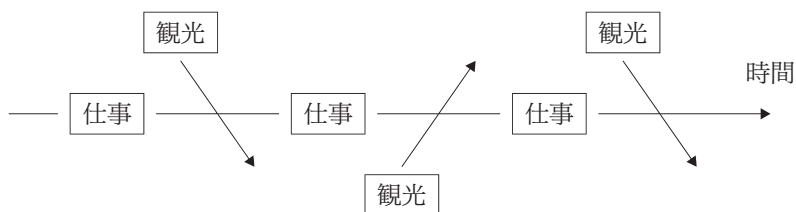
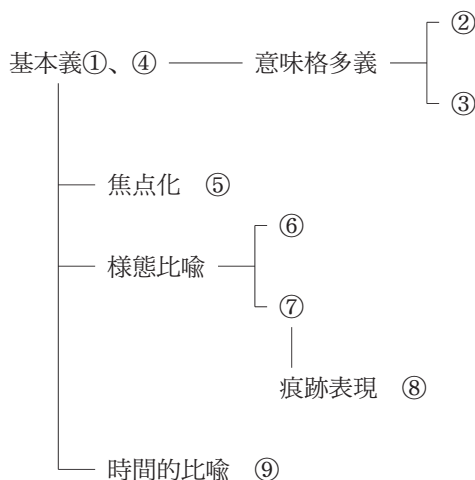


図 4

最後に、「縫う」の多義体系をまとめると、以下のようになる。



#### 4 「編む」の意味

縫い物のひとはりと編み物のひとはりは、英語では同じ語 stitch で表すように、「縫う」と「編む」は、よく似た動作を表現する語である。<sup>(4)</sup>

『明鏡国語辞典』では、「編む」の意味は、次のように記載されている。

- ① ある物を作るために、毛糸、わら、針金、竹ひごなど糸状のものを互い違いに組み合わせる。  
「編み棒で毛糸を編む」「イグサを編んで畳表を作る」「髪を編む」  
語法：～ヲに〈対象〉をとる。
- ② ①の動作をして、ある物を作る。  
「極細の毛糸でセーターを編む」「わらで蓆（むしろ）を編む」「編み機でマフラーを編む」  
語法：～ヲに〈結果〉をとる。
- ③ ①の動作をして、材料をある製品（作品）に変える。  
「毛糸を手袋に編む」「髪をお下げに編む」  
語法：～ヲは〈対象〉で、～ニは〈結果〉を表す。
- ④ 幾つかの文章を集めて本を作る。編集する。また、計画表などを作る。  
「アンソロジー [遺稿集] を編む」「旅行のスケジュールを編む」

「編む」の基本義は、①で、②と③は、結果目的をとる意味格多義である。③のように材料の製品への変化に注目する表現が存在することを考えると、状態変化が「編む」の重要な意味であると考えられる。ここから現象素は、「同じ材質の細長い材料を互い違いに組み合わせて作品を作る」と考えられる。その一部を図で表すと、次のようになる。



図 5

「作品を作る」という部分は、表現できていないが、「縫う」との違いは明らかであろう。



「アンソロジーを編む」は、数多くの文学作品を何らかの基準で選び、順番に並べて一冊の本にすることである。作品を順に組み入れていく様子、もう少し具体的に言うと、ある作品と別の作品の間にもう一つの別の作品を入れる動きが、「編む」という動作に似ていることから派生したと考えられる様態比喩である。または、作品の書かれたページを順に組み入れていく様子と考えてもよいかもしれない。この際、同種の素材を編集しているという点も同じ材料を互い違いに組み合わせて作品を作るという「編む」の現象素を写像していると考えられる。さらに、結果としての作品が出来上がることも現象素の写像である。

「旅行のスケジュールを編む」は、旅行中にしたいことを時間枠の中に互い違いに入れ込んでいく様子が「編む」の基本義の動きと類似している様態比喩であるが、これは、④の「編集する」という意味から派生したと説明するほうが妥当である。ゆえに、④から、計画表の記述を削除し、④からの派生義として⑤を付け加える。

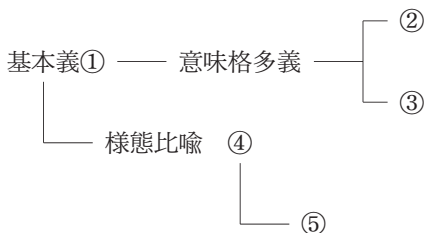
④ （修正）幾つかの文章を集めて本を作る。編集する。

「アンソロジーを編む」

⑤ 計画表などを作る。編成する。

「旅行のスケジュールを編む」

以上の内容をまとめて、多義体系を図にすると



## 5 「縫う」と「編む」の比較

二語の最も違う点は、使う道具で、「縫う」は、針と糸で布などをくっつけるのに対し、「編む」は、同じ素材（典型的には、毛糸）を組み合わせること

である。また、「縫う」は、ジグザグに進む線のイメージで、「編む」は、かたまりのイメージがある。ゆえに、比喩による派生では、それぞれのイメージが写像されるため、「人ごみをぬう」とは言えても、「人ごみをあむ」とは表現できないのである。

一方、「縫う」と「編む」の動作は、よく似ていて、結果として作品ができるという点も同じである。しかし、作品の製作の意味を強く持つ（現象素に含まれる）のが、「編む」で、つなぎ合わせる意味は持つが、作品の製作は必ずしも意味しないのが、「縫う」である。その差が、比喩による派生義に表れる。「編む」の比喩による派生義は、結果目的語にアンソロジーやスケジュールをとり、それらの完成を目指していることを意味する。一方、「縫う」の比喩による派生義には、結果目的語をとる表現がない。

## 6 おわりに

本稿では、認知意味論の枠組みを用いて、よく似た意味を持つ多義語「縫う」と「編む」の意味分析を試み、それぞれの多義の体系を明らかにした。

一つの多義語のそれぞれの意味は、すべて同一の現象素に依存しており、その現象素から派生すると説明することが可能である。また、現象素を比較することで、類似した語の類似点と相違点を見つけ出すことができる。

比喩による派生義は、現象素の一部を写像したもので、どの部分を写像するかによって、異なる派生義が生じると予測されるが、今回の分析では、確認できなかった。さらに、現象素の最も捉えやすい部分が写像されるように感じられたが、この点も今後の研究の課題としたい。

現象素を用いた、多義語の分析は、多義語の意味の理解だけでなく、どのように派生されるかといった多義体系も明らかにすることができ、とても有効な方法であると思われる。しかし、どのような場合に多義が生じるのか、また、比喩的多義が生じるには、どのような条件や制限があるのかなど、まだまだ不明な点が数多く残されている。個々の語の分析を続けながら、多義の生成を包括的に説明できる認知的モデルを今後考えていきたい。

### 注

- (1) この図は、国広（2006：56）で示されたものを用いた。
- (2) このことは、Pustejovsky（1995）の生成語彙意味論の共合成という意味の生成のプロセスでも説明できる。簡単に説明すると、「着物を縫う」では、結果目的語の「着物」の語彙情報の1つである「誰かが縫うことによって生じる」という情報が読

み取られ、その中の「縫う」と動詞の「縫う」が一致するため、共合成が起り、「創造する」という意味が生じるのである。しかし、①と②の「縫う」動作は、まったく同じであり、両者の違いは、動詞そのものにあるのではなく、目的語の名詞の意味に依存していると言える。

(3) 比喩は、イメージ・スキーマまたは、現象素をすべて写像する必要はない。

(4) 『角川類語新辞典』では、「ぬいとりをする(刺繡をする)」の類義語として、「編む」を載せている。

## 引用参考文献

- 国広哲弥 1994. 「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』106: 22-24. 日本言語学会.
- 国広哲弥 1995. 「語彙論と辞書学」『言語』24-6: 38-45. 東京:大修館書店.
- 国広哲弥 1997. 『理想の国語辞典』東京:大修館書店.
- 国広哲弥 2006. 『日本語の多義動詞—理想の国語辞典Ⅱ』東京:大修館書店.
- Lakoff, George. 1993. “The Contemporary Theory of Metaphor,” *Metaphor and Thought*, 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh*. New York: Basic Books.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge: The MIT Press.
- 山梨正明 2012. 『認知意味論研究』東京:研究社.

## 辞書

- Oxford Dictionary of English*. 2005. Oxford University Press.
- 『角川類語新辞典』2012. 角川学芸出版.
- 『新和英大辞典』2008. 研究社.
- 『大辞泉』1995. 小学館.
- 『明鏡国語辞典』2012. 大修館書店.